



福島県立医科大学保健科学部臨床検査学科

北爪 しのぶ

理化学研究所に約20年勤務した後に、2017年10月から福島県立医科大学に移り、2021年の保健科学部設立に向けて準備業務に携わった後、今春から稼働した保健科学部・臨床検査学科で教授職を務めております。ほぼ研究一色だった私が、文部科学省から新学部設置承認を受けるために各種の書類を整え、学生を受け入れるための実習設備を整備する、という仕事に関わったのは、とても新鮮でした。JR福島駅から徒歩5分に位置する新キャンパスの稼働は、新型コロナウイルスの影響を受けて予定より大幅に遅れてしまったので、開学時はほっとしました。はじめは事務員と教員しかいない、がらんとした建物に新1年生が入ってくると、ぱっと華やいさ感じになり、大学はやはりいいなと実感しました。それもつかの間で、4月下旬に発令された緊急事態宣言の影響で、全ての講義がオンラインとなってしまう、再びがらんとした建物になったときは、実に寂しい気持ちになりました。首都圏に比べて対面講義の割合は高かったと思いますが、学生の精神的負担は大きかっただろうと思っています。

さて、所属の臨床検査学科に話を移したいと思いますが、医学部の学生ほどでなくても、かなりの医学的知識を学び、多数の実習を経て臨床検査技師としての国家試験を受けることになります。その一方で、多くの病院検査室で

は、検査業務の多くのステップが自動化されてきています。血液サンプルは自動分注され、自動分析装置へと移動し、自動で様々な検査値が出るような時代を迎えました。臨床検査技師は得られたデータを分析、解析する力がより求められています。また、臨床検査学科で得た知識は、医療に関わる業界で求められるものだと思います。多様な職種で活躍できる人材を育てるためには、ただ正確に実験し、データを出すだけではなく、データを読む力、そして考える力を養って欲しいと思うのです。そのための教育とは何か、を考えながら教員を続けていきたいと思っています。

研究においては、臨床検査学科は魅力的な点があります。まず、血液サンプルの入手が比較的容易です。また、医学部との共同研究がしやすいです。これまでに、循環器内科との共同研究によって、急性冠症候群のバイオマーカー研究を行うことができました。今は、脳神経外科学講座と共同で、グリオーマの診断薬や治療薬開発のための基礎研究を進めています。もともと、糖タンパク質糖鎖に興味を持って研究を進めてきたのですが、培養細胞やマウスが持つ糖鎖に比べ、患者検体から得る糖タンパク質は驚くほど高度に糖鎖修飾されており、この事実を受け止めながら研究プランを立てないと、医療現場で役立つものに仕上がらないと痛感しています。



JR福島駅近くにてできた保健科学部キャンパス



学生のスタディールーム